2　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。　〈岐阜大〉　二〇一六年度出題

　近ごろ、西山のふもとに、かたのごとくの庵結びて、ただひとりゐたる僧り。身にまとふ麻の衣のほかは、本尊・持経よりほかは、持たるものなければ、夢にも人の主に知られでをかすこともなし。法文を知れるよしをも示さざれば、おのづからたづねけるわざもなく、いづくの人と知られねば、語らひ寄るたぐひもなし。いかにしてかは露の命をも支へけむと、いとどおぼつかなくて侍り。

　このこと、世の中にかかる僧侍りと沙汰し侍りけるを、徳大寺の大臣の「いでや、いかなる僧ぞ。召せ」とて召さるるに、１御返りごとをだに申されざりければあやなくおぼえて、このよしを申すに、「いかさまにもアやうあり。ただ召して参れ」とて、かさねて人をつかはされけるに、このすみかをば引きたてて、跡かたなくぞなりにける。さても、戸のうちを開きて見れば、そばの板にかく、

　　　過ぎゆきしかたもくやしき柴の庵を我がすみかとてなに建てりけむ

と書きつけて、あとかたなく見えず。

　この歌の心をおろおろ心うるに、この聖は、この庵を我がためとて建てりけむを悔ゆるなるべし。すべて何も持たざるに、よしなきかりそめの宿を結びおきて、我が身をここに置くゆゑに、２心にもあらぬことを聞くことのイむつかしさよと詠むにや。この人いかに心澄みてウいまそかりけむ。何もなくは、何とてか露ばかりの執もとまるべき。山深く住みて、心に執だにも侍らずは、などてか澄まざるべき。心の乱るるは、妻子・珍宝のためなり。これを見てはし、かれを見てはすれば、心エやや乱れて、まことの悟りはおこらぬとかや。それに、我が身のほかには物も持たで、わづかのすみかをさへしむほどの心ばせ、げに、さぞいさぎよかりけむ。げにげにうらやましくぞ侍る。

　さてもこの人は、３よもまた柴の庵をも結びていませじ。いづれの山の峰、いかなる野のほとりにかいまして、本意のごとくおはしけむと、過ぎしかた、いとゆかしくぞ侍る。あはれ、近きほどのことにて侍れば、４さすが「世の中は天よりほかの下はあらじ」なれば、広くたづねて、いささかの縁をも結びなむとおぼえてこそ。

（『撰集抄』巻五より）

（注）

人の主に知られでをかすこともなし…人にも知られず、また、人の邪魔をする

こともない。

法文…仏の教えやその解説。

沙汰し…うわさし。

徳大寺の大臣…未詳。あるいは徳大寺（藤原）実能（一〇九六～一一五七。左大臣。徳大寺家の始祖）か。

戸のうちを開きて…庵（の内部）を開けて。

執…妄執。世俗の事物への価値を捨てきれないこと。

瞋恨…強く怒ったり恨んだりすること。

問１　波線部ア～エの意味を記せ。

問２　傍線部１を、前後の文脈を踏まえつつ、必要な言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

◎問３　傍線部２「心にもあらぬこと」とはどのようなことか。具体的に記せ。

◎問４　傍線部３について、次の問いに答えよ。

①　現代語訳せよ。

②　作者が傍線部のように判断した理由をわかりやすく述べよ。

問５　傍線部４には、作者のどのような心情が現れているか。わかりやすく説明せよ。

問６　二重傍線部の助動詞「ける」について、次の例を参考に、文法的意味・終止形・文中での活用形を記せ。

例　示さざれば　→　打消・ず・已然形

問７　問題文の含まれる『撰集抄』は、説話集に分類される作品である。次の中から同じく説話集に分類されるものを一つ選び、記号で答えよ。

ア　宇治拾遺物語　　イ　落窪物語　　ウ　竹取物語

エ　保元物語　　　　オ　栄華物語

【解答と採点基準】

問１　ア＝理由がある　イ＝煩わしさ　ウ＝いらっしゃる　エ＝次第に

問２　Ａ僧はＢ大臣の呼び出しに Ｃ御返事さえもＤ申し上げなさらなかったので

Ａ＝３／Ｂ＝２〔「の呼び出し」がないものは減点１。〕

Ｃ＝２〔「さえ」のないものは減点１。〕

Ｄ＝３

問３　Ａ自分の隠棲がかえって興味を引き、Ｂ大臣から呼び出されたこと。

Ａ＝５〔「自分の」はなくても可。「かえって興味を引き」がないものは減点２。〕

Ｂ＝５〔「大臣から」のないものは減点２。「こと」のないものは減点１。〕

問４　①＝Ａまさか再び粗末な庵を建てて住んでは Ｂいらっしゃらないだろう

Ａ＝５／Ｂ＝５

②＝Ａこの僧は物に執着がなく、Ｂ前の庵を建てたことまでも後悔するほど Ｃ高潔な人物だったから。

Ａ＝４〔主語のないものは減点２。〕

Ｂ＝４〔後悔の意味のないものは０。〕

Ｃ＝２〔「から」のないものは減点１。〕

問５　Ａ僧が Ｂどこかわからないとはいっても同じ世の中にいるはずなので、　Ｃ探し出して仏縁を結びたいと望む心情。

Ａ＝２／Ｂ＝４

Ｃ＝４〔「仏縁を結び」のないものは減点２。「心情」のないものは減点１。〕

問６　過去・けり・連体形

問７　ア

【現代語訳】

　近頃、（京都の嵐山や愛宕山などの）西山の麓に、形ばかりの（小さな）仮小屋を作って、たった一人で（暮らして）いる僧がございます。身につける（粗末な）麻の法衣のほかは、ご本尊（の仏）・（常に身のそばに置いて読誦するための）経典以外には、（持ち物として）持っているものがないので、全く人にも知られず（また）人の邪魔をすることもない。仏の教えやその解説を知っている様子をも示さないので、自然と（人が）尋ねた事もなく、どこの人と知られないので、親しく話をしに立ち寄る友もいない。どのようにして露のようにはかない命をつないでいたのだろうかと、ますます（傍目にも）気がかりな状態で（その僧は暮らして）います。

　このことを、世間でこのような僧がいますと噂しましたので、徳大寺の大臣が「さて、どのような僧なのか。召し出せ」と言ってお呼びになると、問２（この僧は大臣の呼び出しに）御返事さえも申し上げなさらなかったので（使者は）甲斐なく思われて、（大臣に）このことを申し上げると、「どう考えても問１ア理由がある（としか考えられない）。とにかく連れて参れ」と言って、重ねて人をお遣わしになったところ、（僧は）この庵をひきはらって、跡形もなく（行方しれずに）なってしまった。そうして、庵（の内部）を開けてみると、傍らの板にこのように、

　今まで過ごしてきた日々が残念に思われる。粗末な柴の庵をどうして自分の住処として建ててしまったのだろうか。

と書き付けて、跡形もなくいなくなっている。

　この歌の意味を不十分ながら理解し（ようと考え）てみると、この高徳の僧は、この仮小屋を自分のためとして建ててしまったことを後悔しているのだろう。全く何も持たないのに、つまらない仮小屋を作って、我が身をこの場に置くせいで、（大臣から呼び出されるという）不本意なことを聞くことの問１イ煩わしさよと（歌に）詠むのであろうか。この人はどのように心が澄んで問１ウいらっしゃったのであろうか。何もなかったなら、どうしてほんの少しの妄執も後に残るだろうか。（いや残らないだろう。）山深く住んで、心の中に妄執さえもございませんでしたら、どうして澄まないはずがあろうか。（いや澄むに違いない。）（一般的に）心が乱れるのは、妻子や珍しい宝のためである。これを見て貪欲になり、あれを見て強く怒ったり恨んだりすると、心が問１エ次第に乱れて、本当の悟りはひらけないとか言う。それに、自分の身体のほかには物も持たないで、仮の住居（を持ったこと）までも悔しく思うほどの心がけは、誠に、さぞかし潔白であっただろう。本当に本当にうらやましいことでございます。

　それにしてもこの人（＝僧）は、問４①まさか再び粗末な庵を建てて住んではいらっしゃらないだろう。どちらの山の峰や、どのような野のほとりにいらっしゃって、（ご自身の）かねてからの願いどおりに（過ごして）いらっしゃっただろうかと、過ごしてきた日々が、たいそう慕わしくございます。ああ、近頃のことでございますので、そうはいってもやはり「この世は天の下よりほかの場所はないはず（＝世の中はみんなつながっている）」なので、（あの僧を）広く探し求めて、ほんの少しでも仏縁を結びたいと思われます。